

## 【書評】

### ピエール＝ジョゼフ・プルードン（斉藤悦則 訳）『貧困の哲学（上）（下）』

平凡社，2014年，567+638頁

本書は、P.-J. Proudhon, *Système des contradictions économiques, ou, Philosophie de la misère*, Chez Guillaumin, 1846 (t. 1, t. 2) の全訳で、邦題は原著の副題から採られている。

日本では経済学の世界は長く「近代経済学」と「マルクス経済学」の2系統に大別され、それぞれが主流視されて別個独立に発展を遂げてきたようにみなされていた。しかし源流に遡ると共通点も浮上する。例えば前者の始祖ワルラスと後者のそれマルクスは、ともに「科学的社会主義」を自任し、ともに「社会経済学」を目指していた（近年多くのマルクス経済学系テキストが内容をよりの確に表すとしてこれを表題としている）だけではない。いずれもが、同じ人物を論敵として副題で名指した著作の公刊によって自らの経済学の形成を本格化してもいた。しかも名指されたその人物は、彼らに先んじて「科学的社会主義」を標榜し「社会経済学」の構築を目標として明記していたのである。これらのことからすれば、翻訳大国といわれ経済学の形成史研究の盛んな日本では、その人物の経済学上の名著はとうに訳され、その全体像について大量の研究が蓄積されていてもおかしくない。しかし翻訳はついで行われなかったし、少数の例外を除いてその総体的な研究も試みられなかった。原因はその名著の難解さにあったであろうが、始祖たちによる酷評もその難文に挑戦しようという意気を阻喪させたかもしれない。かくしてその名著は等閑視されたまま、主流的な諸経済学は自己内在的に発展し精緻化を遂げてきた。しかし近年特に貧困・格差・労働・環境等の問題に関わって従来の主流的

思考の限界や再検討の必要性に対する認識が深まっているようである。そのような中でタイムリーにも、長く閑却されてきた当の人物の経済学上の主著が遂に完訳された。それが本書である。構成は次の通り。

#### プロローグ

- 第1章 経済科学について
- 第2章 価値について
- 第3章 経済発展の第1段階—分業
- 第4章 第2段階—機械
- 第5章 第3段階—競争
- 第6章 第4段階—独占
- 第7章 第5段階—警察あるいは税金
- 第8章 矛盾の法則のもとでの人間の責任と神の責任—神の摂理の問題の解決
- 第9章 第6段階—貿易のバランス
- 第10章 第7段階—信用
- 第11章 第8段階—所有
- 第12章 第9段階—共有
- 第13章 第10段階—人口
- 第14章 要約と結論

原著の表題に示された「経済的諸矛盾の体系」は、第1・2章を導入部とし、第3章以降、1章ずつを当てて、「分業」、「機械」、「競争」、…等を段階的・継起的に分析していくが、その基本的な方法は各段階それぞれの積極的・肯定的に評価しうる経験的諸要素と消極的・否定的なそれらとを析出し、そのポジ・ネガ両面を精細に検討しながら、それらの対立・矛盾を契機として次の段階に移行していくという「徹底した熟慮と不屈の弁証法」である。

よく練られた訳文は体系のこうした展開を

追い易くしているが、なかでも大きいのは、特に晦渋と言われてきた「神の存在の仮説」を核とするプロローグの論理を明快にしたことであろう。体系に入る前に置かれたこのプロローグは、原著初版では特異な頁付けを施され、本論の幾章よりも長大で、それ自体が前書きと三つの節から構成されており、ブルードンがとりわけその重要性を強調し独創性と仕上がりを自負したものである。にもかかわらず、例えばブルードン伝を著し彼を「知的プロメテウス」と称賛したサント・ブーヴでさえそこには「ややこしい」と否定的に一言したのみであるのをはじめ、本書に取組もうとした研究者の意欲を開巻早々に挫き、回避させてきた難関であった。そこに込められた企図の数々を達意流麗な日本語で明晰にしたことは、この邦訳の最大の貢献の一つと思われる。ここでは体系全体の理解に関わる二点に絞って触れておきたい。

一つはそこに示された視座についてである。ブルードンは研究を本格化する契機となった奨学金の受給に際して、将来とも貧しい労働者階級に属し「民衆の子」としてその解放と教育のために尽くすと誓った。後に「民衆」を冠した新聞の刊行を発禁処分をめげず繰り返すのも、下からの経済革命の中核となるべき「民衆銀行」の設立に奔走するのもそのためであったが、相次ぐ著作も同様であろう。しかし『所有とは何か』の時とは違って、宗教を死すべきものと厳しく批判した前著『人類における秩序の創造』はヘーゲル左派思想家たちの喝采を博しこそすれ、肝心のフランスでの反響は乏しかった。一見前著と矛盾する本書巻頭の「仮説」は、あらためてフランス民衆とともにその視点に立って考察を進めるとの表明でもある。社会が変革されていくには、民衆自身の思考から出発しその集団的＝社会的自我が補正され普遍的なものへと自己発展を遂げていく必要があるのであ

て、自らの著作はその弁証法的発展のツールに他ならない。このスタンスは、“神とは人間の類の本質の疎外である”とする言説が超越的な極め付けと解されかねないのとは対照的で、以後、最大著作『革命と教会における正義』の「民衆の哲学」、「哲学への民衆の登場」等も含め生涯を貫くものであろう。

いま一つはそこに開かれている思考世界の広がりについてである。冒頭で提示される、宇宙・自然における動的な均衡の一環として人間社会・経済におけるそれを捉える観方は、最終章でも再提示されて本書全体の最大の枠組みを形づくっているが、それは前記『正義』等にも共通するブルードンの基本的な歴史＝世界認識枠となるものであろう。そして神とは本来、「自然の頂点としての社会」において民衆の生活経験から生まれる集団的＝社会的自我が、自然の諸事象に何らかの配慮を感じ取るのを機に「宇宙的自我」へと昇華されたところでその客体化として成立するものであって、神観念の抱懐は、民衆における「自然の法則と理性の法則の一致」、「地球との連帯」、「宇宙の果て、永遠の彼方まで」の知的到達の潜在的可能性を示すものに他ならない。「労働の組織化」を主題とするブルードン経済学体系は、「労働の分割」から始めて段階的に問題認識を深め第10段階で「労働の過重化」(＝生産の過重化＝地球開発・搾取の過重化＝地球的自然との不均衡化)への警告にまで進むが、それは「この地球における人類の最終目的である…決定的な組織化」を企図してのことである。社会内的・社会-自然間的・全自然的な諸均衡の動的達成を目指すこうした全般的均衡論からすれば、関連する全市場の均衡の同時達成は、それのみではなお部分均衡にすぎないことになろう。

本書には、先述した再検討のための示唆が数多く蔵されているように思われる。

(工藤秀明：千葉大学)